啐　啄　同　時

平成 27 年 7 月

校長室だより

学校教育目標　「大好き芦田 **大好きみんな** 大好き自分」

いよいよ１学期も終わり、子どもたちは夏休みとなりました。地域の皆様には、この１学期、芦田っ子のためにいろいろとご支援を頂きありがとうございました。土日を含めますと４５日間、家庭、地域にお返しすることになりますが、どうかご理解の上宜しくお願いいたします。学校には職員がおりますので、何かありましたらご連絡ください。

「夏の゛ぬくもり゛の思い出」・・・・大人の皆さまには どんな思い出が

私には夏の思い出として、**ほのぼのとしたもの**がいくつか浮かんできます。私の集落は「朝阪」というところで、その集落の中に「夫婦橋」という名の橋がかかっています。昔は、川の真ん中に「中州」があり、その中州に両岸から橋が架かっていたために「夫婦橋」と言われていました。その中州で明治のころから７月２７日には「川裾祭り」が行われてきました。

私が４歳のころ、川裾祭に連れて行ってもらったことを覚えています。この頃は橋の近くに公民館ができており、「お芝居」や「映画」を意味も分からないまま観たこと、小さな村なのに何軒か夜店が来ており、「〇〇買って～」とおねだりしたことを覚えています。その祭りの帰りのことです。父には「肩車」をしてもらって帰ったこと。その肩は重い荷物をよく担ぐので「たんこぶ」のように盛り上がっていたことを覚えています。また、祖父には、眠くなった私を普通に荷台に乗せると転げ落ちるので、「自転車の荷台に取り付けた**やみ籠（竹で編んだ 45cm×90cm の籠)**」に乗せてもらって家に帰ったことを今も覚えています。祖父も父も昔型の人間でしたから「頑固な」ところがありましたが、こんな一場面に、なんとも言えない「ぬくもり」を感じ今も覚えているのでしょう。

こんなことを書こうと思ったのは、今月、映画「ビリギャル」を観たからです。「ビリギャル」とは、成績が学年最下位のビリのギャルだった名古屋の私立高校に通う主人公「さやか」が、塾の講師と出会ってから、１年で偏差値を 40 上げて慶應大学に現役合格した話を映画化した作品です。

高二の夏、「学年ビリ」「人間のクズ」と罵られていた「さやか」が、ポジティブな評価をするひとりの塾の講師に出会ったことから、偏差値 70 の超難関・慶應義塾大学現役合格を目指すことになります。周囲からは「身の程知らず」と言われ、思うように伸びない成績、友達と遊べない孤独。それでも多くの障害を乗り越え、慶應合格という夢に向かって突き進む「さやか」の姿は、やがて、周囲の人々を変え、**崩壊寸前だった家族の絆(父との関係も)を取り戻していくのです・・・・・・・。**

「さやか」と父親の関係は崩壊寸前だったのですが、「さやか」にとって幼い頃、父親に

「おんぶ」してもらった思い出が今、父との心をつなぐ唯一のものだったように思いました。

「さやか」が慶應大学に入学するため家を出る時、「さやか」が**自ら父親に駆け寄っておんぶしてもらう場面**があります。私はそこで、自分の思い出と重なり胸に温かいものがこみ上げてきました。

この夏季休業休中に、親として地域の大人として、芦田っ子と何か温かい思い出ができれば嬉しく思います。

細見綾子　今月の俳句

うすものを着て雲の行くたのしさよ　　昭和７年　25歳作

一見、艶やかで美しく、幸せそうな女性の姿が連想され 素直で純粋な句であるが、この頃の綾子は両親や夫と死別。自らも肋膜炎を患い、丹波で独身生活を送っていた時の作である。当時「私は寝ながら毎日、空を見つめていた。これ程空を見たときはないだろう。この逆境から立ち上がるには、過去を払い退けるしかなかった。この世にあるものを、すべてあるがままにみてやろう。・・・・・・」

薄物には羅、紗など肌が透けて見え、艶やかで美しさを際立たせる感じがあり、「うすもの」という季語の命が一句の中に充実している。また、雲という言葉にある「かなし」「あわれ」の哀傷を振り払って「雲のゆくたのしさよ」と余情的な詠嘆で結んでいるところに、強靭で明るい人柄がにじみ出ている。　　「細見綾子俳句鑑賞」沢木欣一編より

7月　芦田っ子の「きらり俳句コーナー」

かたつむり　夜のさんぽで　であうかな	２年　大西　かずは
なつやすみ　ごろごろしてて　たのしいな	２年　足立　らいが
じいさんの　畑のトマト　まだ緑	３年　中山　しゅな
夕やけが　半分かくれ　ピザみたい	３年　小寺　ふうま
ミニトマト　ふたつくち入れ　おたふくだ	４年　芦田　そら
花火をね　見てる男女が　でれでれだ	４年　小田　すずの
海開き　パシャパシャ遊び　カメラとる	５年　足立　ゆうせい
扇風機　風がさらさら　来てるよね	５年　西川　みちや
扇風機　やる気スイッチ　ここにあり	６年　足立　りゅうへい
「そこどいて」　みんな取り合い　扇風機	６年　芦田　みさき

今月より、この校長室だよりに、子どもたちが毎月作る「俳句」の中から、「きらり」と光る俳句を選出し掲載していきたいと考えています